ご近所のお医者さん

685

佐久間医院　**佐久間孝雄さん**　＝大阪市浪速区

小さな現場のスタッフ会議

それ何かのサインかも

「事件は会議室で起きてるんじゃない！」というのがテレビ番組・映画でありましたが、小さな医院のスタッフ会議は現場（診察室）で唐突に開かれます。内容は、採用薬の変更や救急時の役割確認など多岐にわたりますが、この数年は感染症の議題が増えました。

昨年末の会議は、こんな感じ。「装着してくる人が減るので、少額でも頂いた方がいいのでは」と口火を切れば、「そもそもウチのお願いなので、（無償で）しょうがないんちゃう」「いや経済的には、きちっと頂くべきだ」とスタッフが応酬。

そう、マスクです。新型コロナウイルスが感染症法上の5類に移行したとはいえ、高齢の患者さんが多い当院は「院内マスクのお願いは継続」と決めていました。そこで「持参されていない方へ無償提供を続けるか」についての議論でした。結局、数日かけて、患者さんとの折半で感染防御のため「1枚20円」に決まりました。

ほかにも、密を生む院内は、ワクチン接種に来られた患者さんの待機場所を調整したり、発熱者の導線を変更したりと議題には事欠きません。

今後、増えそうなテーマが介護の問題です。後期高齢者となる団塊世代は、まだまだ元気はつらつとされていますが、親、兄弟、配偶者の介護に時間を割く方もおられます。「いやあ、家あけられんで大変すわー。薬ないのん分かっとったんやで」。この大阪人のおどけた言葉を、つい聞き流したり、下手をすれば叱ったりもしがちですが、背景に深い介護疲れを隠しているなんてことは、しょっちゅうです。

既に浪速区は多職種の連携体制があるものの、患者さんやご家族の精神面などサポートは十分とはいえません。そこに、どう介入するか。ささいなことですが、来院者の表情が気になればスタッフ間で話し合い、個人的なことも医院全体で共有する。そんな小さくとも人間臭い会議を増やしたいと、そう思うのです。皆様もいかがですか？

おしゃべりな隣のおばちゃんが近ごろうつむきがちなら、それは何かのサインかもしれません。